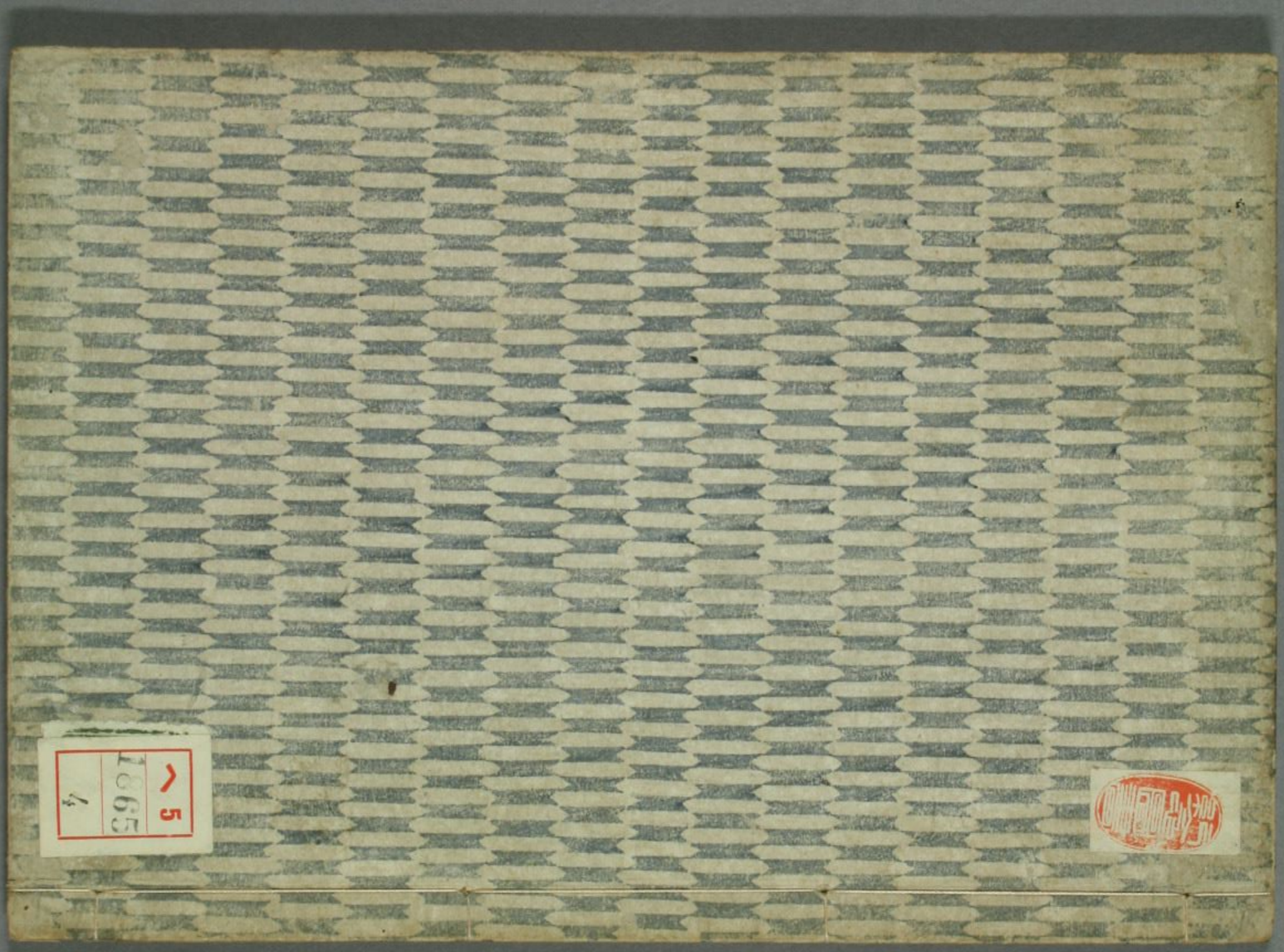
KODAK Gray Scale
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



俳諧天尓波抄巻之四

○十九家下

○志家

世シハ世ニ助字トイフモナリ。助字ナラヌコノ注ヲミテ知ルベシ。過去ノモトイフハ下ノ去倫ニアルコレナリ

志

志ゝ。ワヾらの筋へゝゝゝ。その格ゐ汲わりくゝるゝかなり。去倫の詞ゝ即ゝゝるゝ字ゝのゝ。世ゝ筋ゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ

やくなどするなり。集中例みな。そのかれがれにうたれ
れたるもうえもれもかどもまもり。俳諧抄をもんにる
で。いづるもいたりにより三十三年の天保なるべし。よく年つる巻
白うまうまえつうひらもさで。なりいをのぶるとうまるあるべきや。
○何ぐ行ぐどうつるあり。いつもの花にゆくべきのあれどなどの歌
かりとうあり集例てず

拾　初ざくらをとりてとりたりあり　芭蕉

○乃家

の　うれく俗語つるにまくれてまるべきこうとうつる
をとうるべき。れるのもまなりつるむうまうまるべきあるべきの
あるの意するくうまれ。たるべきで。山のさくらもまるべき野まある

さくらを。山とすなくこするなり。俗さ。古てのしるべ所と
しぶくらつるなり。古てもうるべしあれどのとくしく。乃
つるひ百大つるべうり。さくべで。梅がもくらいて。まく梅ぶとのこいふ
らくるに。古今集に梅の香のすなくるもるるいやべくるべる歌
あり。梅ぐとうべで。梅の香と俗の花のうのをまべめもうみて。梅の香
とうべで。俗のだのうれむるもくさく梅とすまくく香とるるるるる。
かるべくくるれるべで。今の俗のくいべで。うべるくるんがとうべで
いやみくうべてるるのるるにるるべ俗かり。俳諧抄と宗法拾遺と
引れるるべくくるるるる

炭　抱上るの小使をすぼ　利牛
猿　なくなりし草一夜の夢　昨水
続　初あらし畠の人めけふ　支考
炭　竹の皮書踏て書る文の名　石菊
員　陰辰も入歯に寿の志くがく　冬文
春　内侍のそくく代々乃眉の図　荷兮
猿　猿小の猿と世界る秋の月　世蕉
日　一ト吹キ白の木の実ひびる　日
員　火だくのそくなれあひちや　荷兮
猿　白玉乃雪あるならびく猿うれ　車来
日　蝶のすくく一夜ねそり蕉のなく　支錢
日　堤よりの田のまやぶくいさびよき　元丸

日　飯やのよ七屋のみくく仕くき　日
続　庶汗乃とるるくれぐさの夢　支考
員　氣ぶくのよくく留一ふるげる　野水
猿　年のくれやぶれ袴のいくなぶり　杉風
冬　五形すくくれの畠六反　杜国
員　狐つまくくやひくのくくし　竹人
猿　着衣の味くるびく味氣考　里東
日　鉢ひくくく毎考の出うめる　路通
員　鐵のそくすどくくまの乃ぶ　荷兮
猿　桃ぶ考や酒のかまひれあくくき　緑亀

いづるとくくくくぶくのとくくの墨く訓抜ある訓ケぶの。
うれん所あるぶあく。むふより　いびくさくを抜あくくあを

そのうちのうたに、あをかずらあをやぎしたるふく
そくくさぐれど、中ごろのうたにはあるべし。このうた自ら
うつ、形ちまれの島ふりたて、吟葉とうたふ島むりて
ゆうたに、そこにある人の称乱と、あれたる島ふりくさんく、五形
葉ふるあをやぎるにくこれくいくくまゆべし。すべて天ふぢの
ゆうり出ふて、かすかくうの義すしみふものるわれど、今うすくらつく
これをいふり。○まこと手も、のくもむと有ふりるべく、普通の
つうしやうまこどもあり、されど上古中古すくるの事にく、近
古ちかおくれるかり。上古をもむくいかよ
ゆすべく正面にいうぶ。中古ゆり後を表、こくうたに正面とのこり
こくいうむとすると有ふ。上古のそこをふりくいふものとをもざ、さかく
異そつうみう。全く詞のくたいひつくもむとのくこく、言霊と黄ふる

こうあり。牧匂をもみ字をれだ。異例をつうみし。手のべくふ躍く
いうひべく。これをもくも、中古近古のふりをとうなすくるう
をもつくく。ゐあん人を。かの手の黄ふり猛蓋の所よくくらべ。
手ふくる。上古を貴べくふりつく人今。うべのおいを体なる詞とる
移べべりにく。この幻術ふうつ前をふつく人今。俳諧くみ字
なれば。をを言葉をもの。をざれべ。かををつくれん。かをとう
つくさ抜ん

荒人うちむ、あを陸の塩干ふ　友重
月　雨の月ぞうこうるかりの義のり　兮人
月　月のつくうをとうく詠の柳ふる　空水
月　月かうあ月くワゲかりの柳うれ　枝遊
員　蝙蝠をみぶく月の柳ふ　荷子

続　月鴨や東に見しつまくの殘惜　釣帆

甄　秋うやの舟をとらわぐる宸の音　曲水

々　小の御門なれ　あけのまま　芭蕉

いづまも・あるまつぐ・詞あるを・皆のれらとやそもひ・又

和の詞ようくしのこいつりり・こ[illegible]だけ風のてくること後の

柳節といつ白と・ウシロニスルとらみをのこうてるや・秋風の音と

こまぐとこいつ白と・ツヨク立といつまをとぐるこ・いづまとそこ

ちくつりのかりと知るべー

○又よするのと落づけく・如くこいつてつりのあり・これい上古

よりこ手こもまくよりいるこ・物よりこ[illegible]ぬ時こいつりこ[illegible]

春　陽炎のもえのそらるまぬほく　芭人

猿　雨の砌どり・の聲・手筆一迅速　四水

員　さつ[illegible]の[illegible]むれく[illegible]あり　芭人

猿　世中を鶺鴒の尾乃[illegible]　九兆

○手こ・の[illegible]こく・一首の[illegible]のこつ[illegible]あり・吉[illegible]こ[illegible]

ゆくりの人のれとあるこ[illegible]び[illegible]・いづまこ[illegible]上こ[illegible]

なりく・ゆく[illegible]のこいつる・[illegible]こ例みず・これつこに

こ[illegible]こ手こ[illegible]こ[illegible]ぐ・むつ[illegible]

つ[illegible]ぐ[illegible]・かいくむつ[illegible]ぐ・ぐ何ガドウアル

こいつ[illegible]ドウアル何ガ・倒こつ[illegible]・例句のこ上こ[illegible]

こ[illegible]ぐ

ぐ　がこいつりく・上の[illegible]の[illegible]こ・[illegible]・その物こ[illegible]

いつこ[illegible]こ・のこいつ時く・[illegible]ぐこ[illegible]後の持合こ[illegible]

ぐこ[illegible]の・他こ[illegible]ぐ[illegible]

瓢　芋川り弓紀の関すず　頑丁　孤頑
集　ゆきうるの雨や西施が合歓の花　芭蕉
春　杉の木く高日が門さらりつるく　雨相
炭　祖父がるの火桶も半ばりぬ　其角
冬　口来の書が物を月をるく　童五
員　陽ぐいよぐしいつがうるるさ　知人
続　おれが事一子よるく梅の蕾　芭蕉
同　陽ががうるるの祖父の備蔵　馬莧
猿　けまるし盧日が男居なりるく　史邦
同　花ちるる雨を西方が衣をく　芭蕉
月　海をゆくくるが実るこうる　尚白
日序　うれが序よるのんがるるく　其角

続　年ぐ年くふりるよずく物語　文秀
猿　摩郭ぐるるまきのうれる　野水
瓢　粒白つくるる　杉が早つぐ　曲水
員　高日が書よられてうる　胡及
猿　丁雅が荷ふるこぼうる　凡兆
員　そのぐく立くるる知ぐ麻　荷芋
炭　雨面ぐ櫛の小節を拾うるく　孤屋
猿　るぶるるが瓜紀のうち雪るる付　探丸
荒　杉かざり伊勢が布男ふんを雅　其角
同　山ぐるが栗山るるつくわくりるる　宇五
同　おくるかや小町（イチハラ野ニテ）が骨のるるさ　鈞雲
続　まる面や光うりるる鍛冶が遊　桃邑

月　里のみが蕪に花咲きぬ　文考

日　小米もこぼれや稗の穂　百子

猿　夏草や兵どもが夢の跡　芭蕉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とんぐべなかり

○ 遍家

へ

へとくと方角をたてさうこへむとする人なり。若狭集に、方の字をとへとよるなり。行方かなどうなり。ほ世ゆくゑとか久仮名誤レリ

ゆくとつみ何とうぶくくに花事あり。ほ世の人さうれ口くず。

手かどくさたづへとつべき事ともゆくとかなり。これ雅にて。へて伝かゆくとんくるぐたし。伝てとふまくくゆくとつべきもへとつまるとくくるんえとかるあるかなべ。今も年言に

と国くもあるこ。さてこのつ下ぶんかまくぐ。手っ事古今ユ

ふへゆくなどかくかるかどうあり。ゆくとつまとうるあて

いんとかり。へとそど。ちつまをむるふくいみ何とかるくくつて。

古今集秋部に翠岡西西伝がりくるかうへ行くいまくくるとと

かくるあり。これ伝世の人のえうあるこ。上をふといのい遍昭

うあるこ切つるくのうへのうちをつて。さのゆくべを宮くをあれば。

ゆをへとつみかり。これ五十音のい佛とえ佛とのワれかるかり。か

くるひうちくこれだ。へそりとこれとつべうるる事

ゆうるるあ。ふくど。いづくゆくべくゆくべくと問つて。方角をとんかりい

づくゆくべくと問つて。そのゆくゆはべ方をとるべかべ戒

べ問べ問べかどうあ。これこのんかり

荒　ひく島くようろくこうろ柳ーろふ　改寺

炭　杉坂や矢川へとつる家面り　四位

月　海へ降る雲や雲くく波のうち　甚角

月　さくべれや佛へ参る丸木橋　素能

負　供奉ーの草鞋を差へとちゆうみ　野小

続
炭　蒙くへのぐるを山へあげくる　仰三
脊中へのぐるをすやぐる　梅陽
日　せどくるとれだ山へゆく道　盛水
十里だうるのようへ出りて　里圃
続　りめと日向の方へおさやく　柳半
炭　蒙くへ蒙のしそく雪袁と　里按
日　お頭へ蒙のしそく雪袁と　沾凉
蚓　つるをと中で一方へ出りて　芭蕉
炭　俗郭のうへへらげるをる　芭蕉
続　柳のうぐく門を出て行　里圃
集　うの玉を悼を流天肯法の月　芭蕉
日　山陸へ出るのなるうしぐわか　日

○良家

ら

らとうてうたは、うの物のむりのあるものと
さそ同なり。茅茅かぐ。茅の穂とうてつりひるるらべなら
かりるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬

こがらしの　[illegible]　北義仏る町　荷兮

春

[illegible]　[illegible]　[illegible]　

日　　不紹
　　葉の集だりのうり
日　　傘下
　　ゝゝきだりの蕎麦しれか
日　　出林
　　枯あゝ青だりみる夜陣か
炭　　陣地
　　持だりを　ゝゝる　月
菜　　寿芋
　　芋ゝぐ人ノミニカリシニ　ゝゝぐだりも
猿　　探丸
　　やぶの雨を　柳だりい　姿か
炭　　初牛
　　月　ゝゝりたあげ　懐のうゝだり

汁白どものうち貞宝が若ゝゝる　ゝゝゝくゝゝだりゝゝゝ白ゝゝゝ
だ。何ゝゝんのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。自然ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭

集

常陸ぐに川のるげて塩干物　沾徳

さん市やそ他の茶のこゝろもとで　芭蕉

これかり。古てこゝろ入れは。ぞうりとつゝ所ゆり。古言こゝ引ぐこつ
つゝ所あるこゝ。みこゝろ。こゝ別かり。そゝ。ゝ伝こゝ字とゝ所こゝあるこゝ。
ゝのもで。ゝそのもでなどゝつゝこゝ

まで

まぐこゝゝ所。こゝまこゝだゝるこゝにこゝがれやすこゝ所し。たゝこゝで。
ゝこゝかこゝまでゝゝわゝこゝゝ山とゝよゝむゝまでゝすゝ庶のかこゝのこゝし。これ
限をこゝこゝゝ所こゝ。こゝれこゝ。こゝこゝこゝこ

荒　八重咲奥ゆかしき花田かな　杜國

こがらし吹の二重三重あるしらせ　重五

ひく臭ふるぐるひかなしり

荒　いざゆりん寺入こころぶかまぐ　芭蕉

同　咍まぐ砂地つく月見りれ　任他

日　鶏頭の赤てりかるまで紅ふ　市川

続　芥子蒔く咽ゆりん月ふる　空井

同　二見まぐ高地ぶかる月見ふ　支考

冬　野菊ふでふかる蝶のとれて　芭蕉

瓢　双六の目をのぐくまで寄りて　日

炭　祭まぐうるぶかくれ花ふ　四散

員　八日の月のまぐ　荷兮

拾　かなりくるぐ年のくれ　芭蕉

続　うすやか柿の海でた波の跡　魚日

炭　ちりまぐ小ぐうるあやめ外　桃隣

日　蝶のかまぐ相のひろぶれ　日

冬　ふぐふぐ清流の小くぶれゆく　荷兮

瓢　湖のま柳の下まぐ和なり　涼風

樣　麦出ふく鶏まで寄り山ぶ　死紅

同　かなりて塔ぶかりのまるを　笑人

日　魚の骨ふるぐの花をみく　芭蕉

炭　ふぐ沖まぐをゆる　入舟　桃隣

この梅雨が匂の　ふぐ沖ぐいふて　ふるぐ清ふのと

ふるぐふりすぐつるぶゆれふるぐふり

ほくと。こなたこなたより。行ひ一法なり

世の一だうりうぶくの方さまつのことぶかき天王

波なり。これ四で待ぬかる天王波なりけれども。この加

この角ひとつ。やはり。これ四が定の見解。所位

物のてくるのくくなかり。これのおもひ知べし

○陀尓家

だに

ごとくに四ひく。位そのサへとも詞あるなり。

解ぬん。結るん。かどとつるとつるん。又詞とつるん。

デモとも詞とひとつ所とあるとし。ことば。結ひぐさのめあるおく

系統でくしも詞かど。結口ひくぶたの先めとつるも。又詞とへ

て。ことば。ナリとひくうしひとつ。ちくるなりとみくくれい

とも。これを。ことばにみとつて。又願ひく。ことば。ことばひ

くれど。やはく羽織なりとも。羽織ごとかとつるも。

又梅のこと。ことば。手擦とやめ。ぶんとをみが。やはくとくるのなりと

もあるとし。とつぶたすれとつるも。かくのごくすべく

きりしなりのく。お角四の方をとくとする四。ことば。陀

位詞ひ。ぶたごとし。ぶたとし。ぶたとつるとつ

とくとくとあやまるのとくとの結とつ。俳諧とひく位詞とや

ごとくにつるまのなかわで。さごすとし。ごとくとつるのくひとつる

やとある。四ごくくくくと自在とまとすごめく。けあるやは集中

ほと。ごとくとつるれる例ハみえぶとくのとくごとくとひとつるる

のとなり。それごとるのとくとつるひとつ。ことのくくとつるも

次の條さのとくとくとつるひとつ。岐

くれくくやくくみるべ

さくら

さくらを詠ずる句は、俳諸の発句にも、和歌にも、連歌にも、ことごとくみな、春の句とす。通ズレバナリ（ソトサト音）副詞なり。されども、天満宮は、梅をもって、その名をあらはしたまへば、桜の句、とりわけ、多くなり。されども、桜は、梅にくらべて、なよびたる花なれば、桜の句、多くは、なよびたる句

猿　　名月

熟　　ありく　ほうこの　力　さく　那き　蹟

荒　　すびりさく　すぐ　ゆ　えの　蕉俳　蕉角

こわくいづるもぐらにあるなり。中ごろ蕉角が白ハ丸の蕉俳をかいておられたる。天王寺を殺しるいひぞや。すびりぐこすぐこと　つく。ぐこく蕉俳かぐこいつるすとゆやもん者のてこさかめぐや。くさくさは紙結材をもみくんぐ。芭蕉白集こ。光ちが西こ蕉をかるのりくさゆくわやこつる白。ま一ゆうくよるるわぐこつるれで。西ちこ伝説のこなぐ。蕉角の白づくくすぐれるものなり。くぐやりくぐ

○余利家

よるこ　　よるこくこ。すぐこく。こ前一廻ありく。ここよりあるこ。おこ
うれこ付の詞なり。こ例あり。いづるこ。ここよりいづる事。人ゆこ
かけあるぐこくこぐ

○ゆ一例　いづるよりよ

うるこくこ。ゆこくこ。あこりあるよゆく。四こり
外へ出るなどいつ特つこ詞。伝言カラ云

荒　うろりみれも咀のさくこ　冬杭
月　くこまこくこ人ぐ　凡留
月　かのあのや初むこりの　ゆこれ　堅水
月　つくくこ　改中こまるひこり　青江
焼　巨焼こり病こゆく時く夜半ゆ　青芒
荒　ゆこりの紙こりいづるこ　下枝

同　柴より兼ねてあらかじめ家の者　前漳
続　すぐしまわりより足をぶらさげる　支考
荒　竟より毎日酒とる向きより　乗羽
俳　中國よりの仲の吉左右　雅紀
員　久さよりしる油あげする　狐人
猿　はしぐすぎ能ようこのつる　文草
冬　秋より砂ようきの山りげこ　芭蕉
春　岩の間より花ミゆる里　空水
獣　ちつより敷ばうぬ別して　新号
猿　寒より又くるきのしらが　石口
同　秋うぐや四上山乃ふもより　尚白
同　ようゝや名殺のうらより初ゆゝ　旦英

同　鶯のあつたかくより山路が　武之
続　七つより花又おきる女中が　陽和
炭　与力町よりむ西風　初平
日　ゆりぐすき苔の下より冴おゝく　日
春　鳥野より中石奥ゆ　冊ゆそ　昌圭

けるどもの〻〻・前二例のごとくあれどもこれ
ゆゝぶ・よく句をつ〻ひ・ゝ〻ふ苔師員外
の句をよりもとゝ句ふるひやするべ・よくとゝぶ

○第二例　おくよりトヽ

おくゝ・片分はさいおくにくるを手・俗
ゝくゝ・ヨリホカニとゝ・これ又うのゝ
おく宮の花と人ゝさしかゆぬ・ゝくゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○第三例　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭　小より冷まる月のやゝ明　[illegible]

荒　きのゆれ大あらしも小あらし　芦川

同　雲雀より上るやすらふ清水　芭蕉

続　浪よりも勢多をあげて[illegible]の規　順礼吟[illegible]

荒　芦の穂やまよく[illegible]ちる水　路通

続　禁より見ざりよりも[illegible]第ぶ　一[illegible]

荒　きぬぐや後の事よりも[illegible]る　陰風

炭　[illegible]より多い十月の[illegible]　[illegible]

員　[illegible]より[illegible]をさ[illegible]　[illegible]

続　[illegible]より[illegible]有のやすらひて　文考

猿　すぐ[illegible]やすらひ[illegible]百合の花　乙州

炭　[illegible]の[illegible]やなより秋の花　[illegible]

同　風や[illegible]山乃[illegible]　其角

同　鮒汁　[illegible]　芭蕉

[illegible]

かり

引

ずゝ。古へ人の詞にてゝ。中昔のゝ。ことばは。引の雅也。
しかはあらん。和歌かゝ。辛時。いつゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。

荒　若葉うゝすぐるおぐめの手本　長蘿
続　後よびの内侍と今度変ず　支考
炭　うけだ踊り　樋ちるかり　野坡
日　隣りうせ川〳〵　蛭とよびつまる　日
日　婚とよんでうゝ　そらいつゝ　孤屋
猿　股川の朝うめく川こゑて　九兆
続　きのつうゝ　ゆあうこまる月のこと　沾圃
日　山うゝ　石ゴ　花をうつく　芋　仰言
炭　賣ッテ人うゝ　うつくみやること　岩名
日　川うゝすぐゝ　小鮎ゝする　石菊
日　瓜の花これうゝナンボるよう　桃隣

行ゝ。かゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

くゝく術結掛ゝ。ゆゝ。掛りゝゝ。箱ゝ。ゆゝ。ゆゝ。更
多知。モノハクセニゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ

をくんのくんと。をしこれを。なんしのかくよりて後ぐもと。その系
なれ出しくいくで。りくこいつ何あるるぐなく。そのつらいきのうれ。く
んぐー。伝授ニワケしこい何ぐしかるつなり。
○そくこえ。そのゆをとしむ何あり。上の物うくこ何者の何にく。モノ、
クセニこいつんかり。それぐ。ゆくれの。ゆくれ。世りくこゆくこのうれ。
をくぐつかり

○那阜家

なん

これを中のなんと並ぐく。五属のちょぜる。祝のなん。文げト
の六倫のくらの。去倫のなんぐくハこしかり。これを多く文章とつ
なんにく。そこにあるハてすくるー。今世ニ和文をくくく。いつめく
るん何なぐ。いつなるあくと弁ぐつくんぐ。そくこんなるを
ておくぐぐ書くあぐ。何くくこの用をくれぐつくぐ。ワガアラハセル言
葉弁ノ附録二

クハシクイヘリ なんくくく。一章一段一篇のくらくぐくくんしのくくを
たき物ーこ。をんくくくくる事なり。そわぐ。なんとつ何ある
所ぐ。すぐくくこの言をくくる所くくくみぐー。をくこ言く。ゆくく
みこ限ぐぐして一方へくく持何くるくくくくくくくくくくくくくれ
ぐ。くくくのをくひなりくくくくくくくくくくくくく

かどみくさり、いづまでもそのみくさむらのくさのさいはくい、ワづ又
所さぞそれが書とまるべし。上古さも なりもとらり宣命をぐくれ
ぐくみたる

○碁登家

ごと

これく毎らんかなり。頃とうみけるく。ヌビゴトニとりてみぐ
うの名をとけるく。信さきさ同じ。まれもくさ。れもくさ。百
ひるもち一五六十かしんとんの名つと。百ことてこ時の頃

集　えりをり田ごのはるそられれ　芭蕉

同　秋すぐしくまごくさむけやれ茄子　日

同　雪ごくうれでりうもむするもの　同

○毛天家

もて

こわもく。ものくのらく。ものくこで。ものりく大だ。こうする などこ又
ゆくうう頃し。ものくくるどうこびく。コレモ故アラバそべし今ハ此羽ノ持前ヲ云ナリ
この頃を集中例みる手。さてまくくくくくくくる前。このりくくくくくる
の頃より。ものくくくくくくくくくはうつどくくくくくれど。ものくくくく
く。その物とまくくくくくし。ものくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
物語の。ものくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
歳のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

歳　紙炉くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

しく咲うるのあり。折結ばるるよりう

集　因扇ゆくりなくも人の脊中つき　芭蕉

○加保家

かほ

これてたび・顔鳥かどらあめ・てるてるにかるるもうらこがば・あ
ぬぐがらうの白て・をにくるもまま物ず・しのくらうしく体をうち
てのうをうを祖し・されで物のの行ひしやうて情ある附・られく
かのていそで・さうらくなりめぐかげて・うのをのくうる情てく
のうるぐしくいひるして・我をひやうわ情をうを祖ひく・うレイヤウス
カナンヅイヤウニかどいて伝をてあるも・源氏物語などを・「うれいがわ
かどいつて・うスハさちどうしかしのるをうをををひくたうるけんるり

芦　ゆくうをうしんえぐわの野寺ゆうあ　芭蕉

続集　こと草をうれ縫ずうとや園の業藤　葛平
　　菜島にそ花ゆうがかなる雀こうあ　芭蕉
　　日　寺を藤くうをくがかかる月ア尺　日
　　日　山吹の表紙　業のをれりちがかかるわ　日

吟水が白をうく・野寺の信仰・動下して・けをれかをうるるやか
いつをうをかりをいりうをけをうをうをんのうらうを情をうをんをのうちス・
花をあり・吟の小をかどをいつけく・人ををうをく・なのげうる寺のにげ
をひをもかうぐが・をうくををををうをうをうをうをうをを含み
ていをいく神料の白かり・されぐ情をうをうをうを・わが
んのをのをうを・吟寺の信仰よやくをうをやるを・ていを白を
かゆをうをて内をうをり・野をら言・寺をら言・をのをうをを持
をる廣を・寺をかをうをうをあ所をりをひをうを十を之の料をひ

[illegible]・[illegible]・[illegible]・

同　年くれぬ　笠きて草まくらする　同

荒　枝ばかり　雪ふりつもり　冨濃うれ　舎岱

同　むかしがら　西詣　ちりうくさく　牡丹　弘　越人

同　かくばかり　師走の市に　雪ふるそらん　同

続　墨ぬくく　月天ばかり　蓮　梅　村舎

同　みのうきしゃの　霜ばかり　花　治国

横　骨柴の　うればかりも　本の芽　弘　凡兆

同　うぐいすや　富士を　奏をすてばかり　魯

同　芋ばかり　花にまぶるる　水仙　芭蕉

続　めれ梅や　世捨ばかり　土ばかり　嵐雪

炭　世捨ばかり　居見ばかり　孤屋

俳　下関や　地雪ばかりの　蛤の　寒雪

いづれもいづれかつまくるれば　かつまくるものんてるばかりの

まく　これをも　まくとも　まくとも　まくとも　まくとも

上古は　まくとも　まくとも　まくとも　まくとも

ゐるなり　俗語の　まくとも　まくとも　まくとも

も　まくとも　まくとも　まくとも　まくとも

古の　まくとも　まくとも　まくとも　まくとも

など　御結　ニシメガフテ　ニワイテ　心ニカセ

なり　これ　人の　ものを　ゐる為

集　紫の　月や　まくら　芭蕉

荒　草や　かの　まくら　文雄

同　さめて　ながら　まくら　芭蕉

炭　炭ばみるまでに肱をづしぬ　吟抜

日　投らもそもそもぶかまそもそもや　鶴屋

[illegible]

○加天良家

[illegible]

[illegible]

[illegible]